

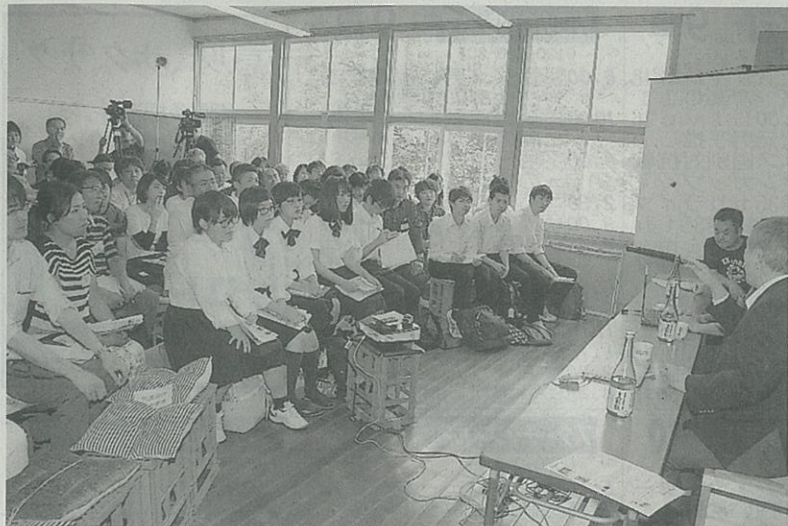


2017年(平成29年)

6月7日

水曜日

世界から見た佐渡 語り合おう 「学校蔵」特別授業再び



佐渡の将来などについて話し合った昨年の学校蔵特別授業



学校蔵特別授業の舞台となる教室で、狙いを話す尾畑留美子さん

佐渡市の酒造会社、尾畑酒造が立ち上げた「学校蔵プロジェクト」。廃校になった旧西三川小学校を改装して日本酒造りを営む一方、古びた教室は過疎が進む佐渡や地方問題を語り合う場として活用している。国内外から様々な人を招いて毎年1回開く特別授業は、今年は10日午後1時から。テーマは「世界から佐渡を見る」「幸せを産む働き方」の二つだ。

「日本で一番夕日がきれいな小学校」。こんなうたい文句があった、高台にある旧西三川小学校。木造の小さな校舎で、少子化で2008年に廃校になった。

旧西三川小で10日

理科室を温度管理を徹底させた酒蔵に改造。この場所ですくすく上げた日本酒「学校蔵」は翌15年に本格的に出荷し、現在は高級料理店と契約するまでに至っている。酒造りの体験もでき、酒造関係者の学び場にもなっている。

特別授業はワークショップ形式。今年の特別授業の講師は、日本総合研究所主席研究員の藻谷浩介氏とライフネット生命保険会長の出口治明氏の2人が務める。

交流し行動、地方も変わる

5代目蔵元 尾畑留美子さんに聞く

尾畑酒造の5代目蔵元でもある尾畑留美子さん。特別授業では学校委員役を担当する。学校蔵プロジェクトの狙いや佐渡への思いを聞いた。

—学校蔵プロジェクトを始めた経緯は。

「廃校になる西三川小学校の校舎がすばらしく、夫に誘われて初めて行った時に一目惚れした。夫は『ここで酒造りをして、酒造りをする人を受け入れる』と言った。私は知り合いの藻谷さんに相談し、特別授業

の構想が生まれた。単なる講演会ではなく、いろいろな人が集まって新しい何かを学ぶ場にした」と

—テーマは佐渡、地方、世界にわたり、それぞれの人々が将来像を意識する場になっている。

「佐渡市の人口が少しずつ減り、将来、ゼロになる時が来るという人もいます。でも、明日から自分たちの社会を少しずつ変えていけば違う将来になる。全く違う世界で生きてきた人たちが、特別授業で話し合い、化学反応を起こす。高校生や会社役員の人たちが交流して、新しい発見をして、明日からアクションを起こす。そうすれば佐渡は変わる。地方も変わる」

—東京の大学を出て映画会社に就職。佐渡に戻り実家の酒造会社を継いだ。苦労もあったのでは。

「当時は日本酒離れの時代。どうすればいいのかを考えた。社会を変えるか、会社を変えるか、自分を交

えるか。自分を変えるのが一番早いと気づき、自ら海外に販路を求めた。佐渡の酒が地球の裏側で飲まれているなんて、ロマンチックじゃないですか。私たちは酒造りの会社。プロジェクトでも、まずは酒とはどんなものかを知ってもらう必要があった。酒造りは地域作りといえる」

—尾畑さんにとって、佐渡とは。

「地方も東京も生活は変わらない。ふるさとは、ふるさとにしかない宝物がたくさんある。帰る場所があるから頑張ると言っただけ、帰る場所が好きになれば、もっと頑張れると思う」

(原裕司)